

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第17回  
 第5章 古田足日先生  
 その2 「散文性のかく得」(中の前半)

昨年(2024年)は、古田足日・田畑精一の絵本『おいしいのぼうけん』(童心社1974年)の刊行50周年だった。私が古田足日先生(1927~2014年)に出会ったのは、『おいしいのぼうけん』が刊行された、つぎの年。私は19歳だった。

「王さまのハンケチには ロバのししゅうが してある」論

巻頭に「さよなら未明—日本近代童話の本質—」が書き下ろされた、古田足日の第一評論集『現代児童文学論』(くろしお出版1959)に収められた評論の一つに「王さまのハンケチには ロバのししゅうが してある」論がある(初出は『文学による人間形成』明治図書1958年所収の「作品論と教材研究が必要だ」)。古田は、「王さまのハンケチにはロバのししゅうがしてある」について、「ぼく自身の感動の度合いとでもいおうか、作品を読んだ時の手ごたえは、与田さんの他の作品、「五十一番めのザボン」や「光と影の絵本」より、重く、確実である。」と述べている。

—あのね。

わたしのうちにたずねてきた、おんなの人が、かえりがけに、そういつて、わたしの耳のところへ、くちびるをもってきました。

—王さまのハンケチには、ロバのししゅうがしてありますの。

おんなの人は、声の影法師のような声でいつてから、ちょっとわらって、かえっていきました。

わたしは、へんな人だなあと、おもいました。

それから、用があつて、S区に、でかけていつたときのことです。

Mデパートメントストアを出ようとしていつるわたしの耳のそばに、

—王さまのハンケチには、ロバのししゅうがしてある。

そういつて、人ごみのなかへ、きえていつた男がいました。その声も、うわあごをかすつて出る、影の声でした。(引用は『与田準一全集』5、大日本図書1967年による。以下も同じ)。

これが作品の書き出しである。「へんだなあ、あの人も。いつか、うちにきた女の人と同じことをいつてる。」と考へこんだ「わたし」は、やがて、「王さまのハンケチには、ロバのししゅうがしてある。」と独り言をいつようになる。そして、結婚式のあとにいつしよに帰つた男に耳打ちしたり、ふたりの男の口げんかに割つて入つて、大きいほうの男の耳もとで「影の声」でささやいたりする。—「王さまのハンケチには、ロバのししゅうがしてある。」

古田足日は、先の評論で、「影の声が成長し、実体を持つかのようになり、つまりはほんものことばではなかつたという発展の経過を、この作品はたどつていつる。この発展過程から、わたしたちは実体のないことばに動かされてもてあそばれいつる現代社会を読みとることができるとははずだ。」とも書いた。

古田が「王さまのハンケチにはロバのししゅうがしてある」に見出した「現代社会」といつる主題を自分自身でも描こうとしたのが『ぬすまれた町』(「歌声は青空に」

の題で『秋田魁新報』夕刊 1960年8月23日～61年6月6日、理論社 1961年) だったのではないか。『ぬすまれた町』は、作家としての古田足日にとっては、はじめての創作単行本である。

### ダブル・イメージ

ユタカはひったくるようにハガキをうけとった。と、その顔が急に生きいきと輝いた。

ハガキの文面は簡単だ。

《あすいきます。姉より》

それだけだ。だが、いま、姉さんがやってくる。これはすばらしいことだ。

『ぬすまれた町』の冒頭に近い一節である(引用は、『全集古田足日子どもの本』13、童心社、1993年による。以下も同じ)。「ハガキの文面は簡単だ。／《あすいきます。姉より》」とあるけれども、ヨシオカユタカは、ひとりっ子で、彼に姉などいない。

シズコ女史はテーブルの上のハガキをひっくりかえした。

(中略)

ハガキには、

《あすから家庭教師にやってきます。みどり》

と書いてあった。このかんたんなもんくは、ユタカにきたハガキのもんくと似ている。そして、このハガキの字とおなじだった。

シズコ女史というのは、ユタカの母だ。そして、女史あての葉書は、ユタカのうけとったものと似ていたのではない。まったく同じものだった。ユタカは、《あすいきます。姉より》と書かれた葉書を風にとばされてしまったのだが、シズコ女史から見せられたそれには、ユタカがつけたはずの赤い絵の具のあとがあったのである。

上野瞭は、古田がこの作品で試みた方法の一つとして、「一つのことばからダブル・イメージを読者に与えるように努力すること」(「旗手の文学—古田足日に関する覚書—」『戦後児童文学論』理論社 1967年所収)と述べた。「ここでは現実の(あるいはそのひとつひとつの構成要素の)二重性といったことが描かれようとしている。」とは、藤田のぼるの意見だ(「古田足日あるいは方法化された誠実」『季刊児童文学批評』1983年8月、カッコ内・傍点原文)。一枚の葉書がふたとおりのメッセージをもっていただけではない。ゴローたちの「少年探偵団」は、同時に「少年グレン隊」であり、「ゼンミツレン」=「全国密輸連合」は、実は、「ゼンミレン」=「全日本未来連合」なのである。

上野瞭のいう「一つのことばからダブル・イメージを読者に与えるように努力する」という方法、これも、実は、与田準一のものだったのではないか。光文社版『五十一番めのザボン』(1951年)の「あとがき」に、与田は、こう記している。

「五十一番めのザボン」は、この、わたくしのうまれ故郷(福岡県瀬高町——宮川注)を、発想の起点として、ひろげては、育ての故郷日本の、戦後五ヵ年ほ

どが、もたらした、わたくしの心象絵図です。絵図ですから、たとえば、「知らぬ火の海」を「知らぬ日の海」などと書いてしまった、わたくしの心象なのです。この仮作物語は、すべて、わたくしの空想のなかのものであり、幻想のなかの話です。

古田足日はいう。――「「知らぬ火」を「知らぬ日」と書く、このやりかたが與田の文章の特色です。ふつうの小説、童話の文章は現実をできるだけ現実らしく書こうとします。だが、與田はそれとはちがって、現実を作品のなかでかえてしまいます。／（中略）與田の文章は`現実プラス與田の気もち`とでもいうものです。多くの作家は文章をとおしてじぶんの気もちを出していきますが、與田は文章そのものにじぶんの気もちをこめています。」（古田足日「解説」『少年少女日本文学全集』12、講談社1977年所収）

『ぬすまれた町』で、農民たちは、カンヅメ工場から野菜や肉、さかなのクズを買い、それでブタを飼うようになる。建設中の遊園地ドリーム・ランドに土地を売りわたさない「呪いばあさん」は、「会社がクズの値をあげて、ブタを買うねだんを安くしたら、どうなるか。」と演説する。ホージョー市全体が資本の側が設定した経済のサイクルにとりこまれてしまった。人びとは、電気製品を購入することと、ドリーム・ランドにあそびに行くことだけを楽しみにはたらく。さらに、毎朝、音楽と号令にあわせて、いっせいに歯をみがく運動がすすめられる。広場での「ハミガキ運動」に参加する人たちの影には、番号数字がうき出している。影に番号をもち、個性をうしなつた「私」は、「私」以外のどの人間とでも、とりかえ可能になる。古田足日が描き出した「現代社会」は、こんな姿を見せるのだ。

『ぬすまれた町』は、古田足日が与田準一の「王さまのハンケチにはロバのししゅうがしてある」に見出した「現代社会」という主題を、「一つのことばからダブル・イメージを読者に与えるように努力すること」という与田準一的ともいえる方法で描いた作品なのではないか。……が、これは、奇妙なことでもある。

### 「呪術よみがえる」日

前回も述べたように、小川未明の童話の性格を「近代人の心によみがえった呪術・呪文」（「さよなら未明」前掲）として批判し、散文性の獲得をめざすというのが『現代児童文学論』のころの古田足日の評論のモチーフだった。『ぬすまれた町』が奇妙だとしたのは、それが詩的、象徴的な面をもっているからである。

『現代児童文学論』の「あとがき」は、「最近読んだ本のなかで、いちばんおもしろかったのは、安部公房の「第四間氷期」と西郷信綱の「万葉私記・初期万葉」でした。」と書き出されている。「おそらくこのあたりに、ぼくの求める児童文学の姿がかくれているような気がします。「第四間氷期」では、現実には奇妙な二重構造を持っており、その表皮をはがしていくと現れてくるのは、……」と述べたあと、つぎのように書かれている。

人間をとりかえし、新しい時代を作るには、壮大なエネルギーが必要です。「万葉私記」の世界では、愛情も自然に対する態度も、今のようにわい小化されておらず、ことばは創造力に満ちています。ぼくはずっと日本近代童話の呪文的性質

の清算を主張してきましたが、今、新しく「呪術よみがえる」日を期待しています。

「呪術よみがえる」日といっているが、『ぬすまれた町』の創作は、そのような、よみがえりでもあったのだろうか。古田足日先生が、詩的童話の可能性を示した与田準一に触発されたようにも見える『ぬすまれた町』を書いたことを記憶にとどめておきたい。(つづく)

(付記) 内容が宮川健郎「与田準一と古田足日—童話が詩であった時代—」(『武蔵野文学館紀要』第6号、2016年3月)と重複することをおことわりします。